

文 國 大 子 女

第百三十六号

平成十六年十二月発行

揺らぐ檀那……………	中前正志(一)
——丹波国穴太寺縁起小考——	
土神と狐の物語……………	工藤哲夫(三七)
——那珂(中勘助)『提婆達多』からの影響——	
黄表紙の準体法……………	田上稔(二三)
和解本善書の研究……………	八木意知男(三五)
——紹介・『陰陽文』、『太上感應経』——	
彙報……………	(二五)

彙 報

賀茂祭使行列の道筋を辿って

国文学会行事

短期大学部二回生 亀山 千尋

○学会旅行（秋季） 「賀茂祭り 平安を歩く」

十一月三日（水曜日・祝日）

平安時代の賀茂祭の祭使行列の道を、大極殿跡から下鴨神社まで、徒歩にて、辿りました。

○秋季公開講座（大学と共催）

十月二八日（木曜日） 四講時

講題 王朝女流日記の魅力とその特色

講師 新潟大学名誉教授 宮崎 莊平氏

○過年度の謝恩会（卒業パーティ） 余剰金が国文学会に寄付されました。平成十四年度（江富助教授アドバイザー）分が三万円、平成十五年度（田上助教授アドバイザー）分が十四万三千元です。学生が各教員に各種書類等を提出するための鍵付きメールボックスを、購入致しました。卒業生の皆様、ありがとうございました。

十一月三日。十一月になったというのに、この日の天気は、照りつける太陽が気になるほどの快晴。賀茂斎院を囲むもみじは、まだ青い葉を揺らしていました。

今回私が始めて参加した国文学科会旅行は、平安時代の賀茂祭（現在の葵祭）の奉幣使が通った道筋を実際に歩き、それによって賀茂祭の再現を試みる、というものでした。そのために出発前の説明会で、もとの賀茂祭の形式に倣って、賀茂斎院（現在は跡）より出発して一条大宮にて奉幣使一団と合流する祭使のグループが作られる事となりました。私は斎院跡の方へ行くことにしました。そのために賀茂斎院跡にやってきた、というわけです。

早めに到着したので、斎院グループを引率なさっていた中前先生の斎院についての解説（現場の石碑に同じことが。知りたい方は、京都市上京区櫛谷七野神社境内まで）を聞かせていただきました。ちなみに斎院とは、賀茂神社に奉仕した皇女、女王（未婚）のこと、もしくはその住んでいた場所のことです。役目としては、伊勢の斎宮に似ています。

予定より早く到着したため、さっそく境内周辺を散策することになりました。散策では、境内下に（謎の）鹿のブロンズ像を発見し、斎院グループの半数（と言っても全員で五人でした。）が、中前先生と峯村先生の監督の下、石碑に刻まれたくずし字を解読してみたりしました（結果、謎は謎のまま）。この一件は、今回の国文学会旅行の趣旨にはまったく関係ないことでしたが、祭使グループの気分はアカデミックに盛り上がりました。

暫しの散策の後、私たち斎院祭使グループは奉幣使グループと合流するため、斎院跡を出発しました。一条大宮へ向けて大宮通を南下し、それから当初の予定通り、無事に一条大宮で加納先生の引率する奉幣使グループと合流しました。合流後は、下賀茂神社を目指して元一条大路であった一条通を東に抜け、一条戻り橋を渡りました。途中の道は、どこまでも住宅街で、一見すると謎の団体が道に迷って迷走しているように見えたかもしれません。加納先生によると、まだ経路が明らかになっていない部分があるそうです。つまり、おおかた正確な賀茂祭使の行列の通った道を歩いてきたわけです。しかし、だいたいても千年前の道筋を再現することが出来たのですから、ここはやはり、千年もこの場に存在する京都の町の歴史の重みを感じずに入られませんでした。

ちよつとした休憩を挟んで、一団は引き続き下賀茂神社を目指

しました。時間の関係と諸事情により、上賀茂神社行きは断念しましたが、ここで少し遠回りをして御所を通って下賀茂神社に到着しました。

このようなイベントに参加する機会を作ってくださった（この旅行の発案者？）加納先生、中前先生、そして峯村先生に、大変感謝しています。

それから最後に、ごちそうさまでした。

学会旅行参加記

文学部国文学科三回生 本 田 桃 子

「平安京を歩く」に参加した十一月三日は、平安京を歩くのにこれ以上ないほどに適した快晴でした。まず、参加者は事前説明会を聞くためにJ校舎に集まりました。賀茂祭で斎王がどのようなルートを辿り下鴨神社まで歩いたのかを、詳しく加納先生に説明してもらったためです。それによると、現在と平安時代では町並みが異なるため、迂回しながらもなるべく平安時代と同一のルートを歩こうということでした。

まず、私たちが最初に向かったのは、京都市生涯学習センター

である「京都アスニー」でした。この京都アスニーの敷地は、平安時代の平安宮に位置し、酒や酢などを司っていた酒造司という役所が位置していたそうです。ここには平安京の大きな模型が展示しており、加納先生がその模型を指しながら詳しく教えて下さったので、現在私たちが歩いている京都が、昔はこんな風だったのだという感慨を深めることができました。

その後京都アスニーを出て下鴨神社に向かい歩きだしました。普段何気なく歩いていたのでは気付かないような、遺跡を示す小さな看板や石碑が所々にあり、千年前の加茂祭の行列に思いを馳せました。

道中、休憩として某有名菓子屋にて足を休めた後、一行は再び下鴨神社へと足を進めました。その途中、丁度御所開き中であった現在の京都御所内を通りましたが、自分たちの足で歩くことによって、平安時代と現在の御所がこんなにも移動していたという事実を改めて実感することができました。下鴨神社までの道のりは私たちが思っていたよりも長く、斎王の行列が、重い着物を着、足元も整備されていなかった道を歩くのは、どんなに大変なことだっただろうと思いました。

やっとのことで下鴨神社に到着すると、真っ赤な鳥居が私たちを出迎えてくれました。神社を流れる御手洗川で、私たちも斎王

を真似て禊をしてきましたが、斎王に選ばれた多くの女性たちはこの川で、一体何を思っ禊をしていたのだろうと思いました。

今回私は、国文学科の旅行に初めて参加しました。いつも学校でただ座って講義を受けるのとは違い、こうして実際に自分の足で歩いて知識を深めることができ本当に良かったと思っています。

また、次回もこのような行事がある場合は、もっと多くの人を誘って参加したいです。

女子大國文

第百三十六号

平成十六年十二月十五日 印刷
平成十六年十二月三十日 発行

〒658-8501 京都市東山区今熊野北日吉町三番地

編輯兼
発行者

京都女子大学国文学会

電話 〇七五-五二一九〇七六
FAX 〇七五-五三一九一二〇
振替 〇〇八〇-五-三二四

〒606-8584 京都市上京区上長者町通黒門東入

印刷所

西村印刷株式会社

電話 〇七五-四二-四一〇八代
FAX 〇七五-四三-六二八二